

国際英語論と小学校英語教育

－ 音声指導と文構造の指導（2）－

下内充¹・米田尚美²

(1: 管理栄養学科, 2: 子ども発達学科 [非常勤])

要 約

小学校の英語教育は、平成32年度から中学年に外国語活動、高学年に外国語科として実施される。中学校との連携も視野に入れながらその指導内容を文部科学省の指導要領に沿って本論では文構造の指導に関する要点を展望した。文構造のうち、小学校においては動詞の後に来る要素としては「補語」と「目的語」のどちらかが来る場合のみを扱うが、修飾語句として前置詞句の理解は指導内容としないまでも必要であるので、語順の指導の際の指針として日英語の鏡像関係に重ねて説明した。これらの求められる標準性から逸脱する場合も指導現場ではあり得ると予想されるが、国際通用語としての現在の英語は意思疎通の道具としての側面を重視し日本語から来る干渉においても寛容であるべき点を強調したい。

キーワード：小学校英語教育、文構造の指導、国際英語論、日本人の英語

1. 英語指導の目標と内容

1.1 中学年の外国語活動

文部科学省の中学年の「外国語活動」の目標は次のように、素地という表現で高学年の基礎の準備段階という設定になっている。¹⁾

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

今回は音声指導について要点を展望したが、今回は文構造の指導に関してまず中学年の外国語活動の目標や内容に沿って確認しておきたい。

中学年の指導においては英語の文構造についての事項を特に取り上げている部分はほとんど見当たらない。「多くの表現を覚えたり、細かい文構造などに関する抽象的な概念について理解したりすることを目標としていない」としている。²⁾

中学年の外国語活動においては「言語を用いて主体的にコミュニケーションを図ることの楽しさや大切さを知ること」「日本と外国の言語や文化について理解すること」を体験的に身に付けることで、高学年の外国語科で英語の特徴やきまりに関する事項へとつながるように指導すべきである。³⁾

児童に英語の文に対する構造を意識させるという指導はこの学年では求められていないと考えていいが、指導

者は後の高学年の指導時に備えて、どのような構造の文を表現として指導していたかをしっかり認識しておく必要はある。

1.2 高学年の外国語科

高学年の「外国語科」の目標は、「外国語活動」の目標に、「読むこと」「書くこと」を加えたうえで、次のようにコミュニケーションのための基礎力を育成することを目指すとしている。⁴⁾

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

英語の文構造に関して見てみると

エ 文及び文構造

次に示す事項について、日本語と英語の語順の違い等に気付かせるとともに、基本的な表現として、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること。

とあり、⁵⁾ 小学校の外国語科においては、「次に示す事項」として示されている(ア)文、及び(イ)文構造について、「基本的な表現」として指導することが意図されて

いる。これらの事項について指導者として理解すべき詳細については次章で考えたい。

平成 23 年度からの高学年の外国語活動導入以降の課題として「指導要領解説」では次の 3 点を挙げている。⁶⁾

- ① 音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない,
- ② 日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある,
- ③ 高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている。

これらの点を考慮し、高学年の外国語科の内容に関して、「知識及び技能」については、「音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語の違いに気付き、」「実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにすること」としている。⁷⁾ しかし、「④学習指導」において

文及び文構造の指導に当たっては、文法の用語や用法の指導を行うのではなく、言語活動の中で基本的な表現として繰り返し触れることを通して指導することとした。

と明記し、⁸⁾ コミュニケーションにおける重要性と中学校との連携に配慮している。

1.3 文構造というとらえ方

中学校の外国語科では、「文および文構造」に文法事項が加えられ「文、文構造及び文法事項」として指導することとなっているが、小学校の外国語科においては、示されている文及び文構造について基本的な表現として指導するとされている。すなわち、例えば、「代名詞」の用法や「動名詞」の用法について理解し活用するのは中学校の段階で行う。⁹⁾

また、文構造という表現で想起される文型というとらえかたについても、英文の分類など文法につきすぎる恐れがあるためか、避けたいとされている。

この点について少し長くなるが、解説原文を引用しておきたい。¹⁰⁾

「文型」ではなく「文構造」という用語を用いているが、これは文を「文型」という型によって分類するような指導に陥らないように配慮し、また、文の構造

自体に目を向けることを意図してより広い意味で「文構造」という用語を用いたものである。

文及び文構造については、(中略)言語活動の中で、文法の用語や用法の指導を行うのではなく日本語と英語の語順の違い等の気付きを促すようにしたり、基本的な表現として繰り返し聞いたり話したりするなどして活用したりすることが求められる。繰り返し触れることによって英語の語順に気付け、その規則性を内化させたり、自ら話したり書いたりする中でどのように語と語を組み合わせれば自分の伝えたいことが表現できるのかということに意識を向けさせるようにする。

すなわち文型という枠を始めに与えてそれを見つけるような学習ではなく、言語活動を通して柔軟な構造意識を体得させたい、ということであろう。しかし、ある程度の示唆は必要ようで、「文や文構造の指導に当たっては、次の事項に留意すること」として文例を挙げている。¹¹⁾

例えば、主語＋動詞＋補語という文構造を用いて人物を紹介する際、次のように音声とともに英文を列挙して提示することで、is が共通して用いられることや、is の後ろに説明する語句が続くことなどに気付かせることができる。

This is my hero.

He is a good tennis player.

He is cool.

したがって、指導者はしっかりと構造意識を見失うことなく、過去の使用例の構造を把握しておく必要があるということになる。

2. 指導者の文構造に関する知識

2.1 文の要素と品詞

小学校において英語を指導するためには英語の文の基本的な構造を中学校での指導内容も含めて理解しておく必要がある。指導要領において、文型という用語を用いないというのには実は英文を実際の使用場面でこの型に沿って説明しようとする、以下で見ると、その説明のために混乱を招く可能性があるからで、中学校も含めてその文法のための指導に陥ることを回避するためである。したがって英文の基本的な枠組みとしての文型を指導者が理解しなくてもいいということではないという点を確認したい。

文の構成要素としては主語、動詞、目的語、補語という用語を使用するとして、小学校においては次の3つの構造を扱う、としている。¹²⁾

- a 主語 + 動詞
- b 主語 + 動詞 + 補語
- c 主語 + 動詞 + 目的語

したがって5ないし8種類の基本的な文構造（英文法での「基本文型」¹³⁾）のうち次の2種類の文は小学校では扱わない。

- d 主語 + 動詞 + 間接目的語 + 直接目的語
- e 主語 + 動詞 + 目的語 + 目的格補語

これらの文構造の指導は中学校で行うことになっている¹⁴⁾が、小学校の教材中に使用されないわけではないので指導しないまでも指導者は理解しておく必要はある。

中学校の外国語科においては、すでに述べたように「文、文構造及び文法事項」として指導することとしている¹⁵⁾が、この中に小学校の外国語科において扱わない文構造に関する知識は含まれているので、この内容の理解は必須である。

文の構成要素と品詞とのかかわりは混乱を招くため用語の理解が求められる。

品詞としての名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞とその役割については、語レベルだけではなく、句レベルまで指導者は理解しておきたい。¹⁶⁾ また構成要素には次の文中の修飾語句（下線の部分）は含まれないと考えられるので今後はそれ以外の語、語句は修飾と言及することにしたい。¹⁷⁾

I sometimes get up at 6:00.

I went to Okinawa.

小学校の指導では上記文構造(a、b、c)内では「動詞」という用語で説明されているが、このような場合の動詞は「述語動詞」のことで、文中での役割（機能）の意味である。動詞は後で見ると不定詞や動名詞となり句レベルで名詞としての機能も果たすので混乱しないように注意したい。それ以外の品詞と文内の機能との関係は（少なくとも小学校の指導上は）簡単で次のようになる。

品詞	機能
名詞 / 代名詞	主語 目的語 補語
形容詞	補語 修飾
副詞	修飾

動詞は述語動詞として文の要素になる以外に、次のように名詞、形容詞、副詞としての用法があるため上の表の機能はすべてもっている。ただし、文法事項としては扱わず、「五つの領域別の目標を達成するのにふさわしい」「基本的な表現」として指導する。¹⁸⁾ 指導範囲の用法に下線を入れて示す。

動詞	句レベル
不定詞	<u>名詞</u> 形容詞 副詞
動名詞	<u>名詞</u>
分詞	形容詞 副詞

したがって次のような文例に関しては目的語（文の構成要素）としての使用であるが文法的説明は行わない。¹⁹⁾

I like playing the piano.

I enjoyed swimming.

I want to go to Italy.

I want to be a vet.

2.2 文の要素と修飾

文の構成要素以外にも修飾をする語、句は多用されるのでその形態を小学校英語の学習範囲から見てみよう。文の構成要素となるのは名詞 / 代名詞、形容詞、動詞であるが、修飾となる形容詞、副詞がそれぞれ単語レベルで名詞、動詞につくことを確認したい。

2.2.1 形容詞と副詞の役割

代名詞の役割は文の構成要素としては単独でその役割を果たすので、理解は容易であろうが、名詞の場合はその前に冠詞、代名詞（所有格）、形容詞（さらに名詞）をもつ場合があり（すなわち修飾語をもつので）機能的には句レベルの名詞（名詞句）も考えなくてはならない。²⁰⁾

2.2.1.1 形容詞と名詞句の内心的構造

まず名詞句の構造について考えてみよう。2語からなる a pen、my name のような構造は冠詞、代名詞をもつ構造でまとまりを認めやすいので除外する。そ

れ以外で形容詞をもつものを見てみる²¹⁾と、疑問詞をもつ what time、what sport や many flowers、your favorite color、my best memory は

[形容詞 + 名詞]

という構造で、内部の形容詞は名詞を修飾するが、この構造自体は単独の名詞と同じ役割を果たすので、いわゆる内心的構造²²⁾と見なすことができる。同じような関係をもつ music room、ice cream、tennis player、soccer shoes の構造も

[名詞 + 名詞]

ではあっても前の名詞が後ろの名詞を限定する形でひとつの名詞としての扱いができる。さらに

[形容詞 + [名詞 + 名詞]]

となる a good tennis player、new soccer shoes などの句も場合によっては必要となる。これらの句は全体で名詞としての役割をもつことになり文の構成要素としては主語、目的語、補語のどれかの役割を担う。

すなわち、修飾としての形容詞は名詞句の内心的構造の中にしかなく、補語としての形容詞は be 動詞の後に来る、という理解でいいことになる。

2.2.1.2 副詞の役割

副詞についてはいわゆる強調の副詞として形容詞、副詞につく場合を除けば、全部動詞にかかる修飾と考えることができる（文の構成要素とはならない）。

I like soccer very much.

のような、very much 全体で強調を表す句では much は単独では使用されないため、副詞句としての用法は避けられない。また6年生用教材には He is so cool. という文 (p.49) も見える²³⁾が感覚的に理解は容易であろうと思われる。

その他の副詞は

1 後置修飾

turn around / right / left、go straight、go home、sing well、cook well

などであるが、いわゆる頻度を表す副詞が5年生用教材、6年生教材に

2 前置修飾

We sometimes play soccer together. [6-49]

I usually jog with my dog around the pool. [6-33]

とそれぞれ使用例がある。さらに、句動詞扱いした方が分かりやすいものとして、

3 句動詞扱い

stand up、sit down、get up、wake up

などが日常を語るのに必要とされる。²⁴⁾

その他に注意すべき副詞として、主語と同格的に使用される all と、同様に文末で前の代名詞を補う too 「同様に、もまた」の使用例もあるが、前者では日本語との並行性があり、感覚的に意味をとることは難しくない。

They are all tall. [6-73]

その子たちはみんな背が高い。

Tall and small players, all playing ball. [6-73]

背の高い選手、低い選手、みんなボールを投げあっている。

また後者では強調される語との音声上のリズムで感覚的に意味をとることは難しくない。次の文では、we と too に強勢が置かれるはずである。

We can be good, too. [6-73]

2.2.2 前置詞句の扱い

形から最も見分けるのが容易なのは前置詞句と呼ばれるもので、「前置詞 + 名詞」という構造である。注意したいのは、日本語でそれに対応する「名詞 + 助詞」という構造が大部分副詞句をつくる²⁵⁾のに対して、形容詞または副詞としての用法をもつことである。したがって

前置詞句	機能
形容詞句	補語 修飾
副詞句	修飾

という役割を文中で果たすことになる。

小学校の英語においては単語レベルのみ文構造を扱うことになるので、前置詞句に関しては一部の補語の例以外は修飾として説明することができる。しかも補語の場合は be 動詞の場合のみ扱い、become、look、feel の場合は中学校の学習項目としている。²⁶⁾ また前置詞句が名詞にかかる（修飾する）形容詞句の場合は指導要領

には直接言及はなく、ほとんどの例では副詞句（動詞、形容詞にかかる）として使用されている。²⁷⁾

ここで be 動詞の後に前置詞句をとまなう構造について考えておきたい。

a の文構造（第 1 文型）

It's on the desk.

b の文構造（第 2 文型）

This is for you.

I'm from Shizuoka.

a の文は前節で見た I went to Okinawa. と同じ構造で前置詞句は場所を表している。このような場合 be 動詞は「存在」を表すとして、「ある/いる」を訳語としている。単語レベルでは副詞が用いられる (It's there.) ため、その並行性からも修飾というというらえ方は to Okinawa と同じように、構成要素以外は修飾と考えるのであるから、「かかる」関係とみることができる。

ところが、b の文は「かかる」構造はなく、一般には「同定」(identification) を表す²⁸⁾ と考える A is B. の構造である。

便宜上この構造を単語レベルからの並行性で考えてみよう。

He is a kind man.

He is a man from Shizuoka.

これらの文から（文脈上明らかな）名詞をとったのちの形容詞 / 形容詞句は B の役割を担うことになり、補語として意識される。ここでの形容詞（句）の名詞に対する関係は存在ではなく記述 / 説明的になっているのが感じられる。(This is for you. は「これは、あなたのためである」には違いないが、This is something for you. 「これは、あなたのためのもので」に近い。)

そこで、A is B. 「A は B です」から文字どおりは（先に述べたように日本語には名詞とつなぐ助詞は「の」しかないので）b の文は、

これはあなた（のため）のもので。

私は静岡の人です。

と理解することで英語の側からの形容詞句の補語としての役割は保持される。

したがって前置詞句に関しては be 動詞の後の補語と読めるものを除いて副詞句（修飾）として、「かかる」

句として解説することができる。すなわち

動詞 + 前置詞句

名詞 + 前置詞句

は左向きに（文の構成要素ではなく）修飾として、前者は動詞に「かかる」構造、後者は名詞に「かかる」構造と考えることができる。ただし、前者の副詞句の場合は動詞の直後にある必要はない。次の例を参照。

I have breakfast at 6:00.

You can see it on your right.

典型的な時間と場所を表す句である。

2.2.3 義務的な副詞・副詞句

文の構成要素として小学校では主語、動詞、目的語、補語を扱うのはすでに見たとおりである。しかし、文の要素をなくてはならないものとするなら、次の下線部の修飾語句もそれを取り去ると不自然になる。

It's on the desk.

I get up at 7:00.

I go to school.

特に、「主語+動詞」（a の文構造）で顕著で、この不自然さを考慮するなら、これらの修飾語句も要素としたいところである。一応、すでに述べたように少なくとも小学校においては修飾語句については文法的説明をしないという方向で指導するため、この種の語句は要素としない。ただし、それに対応する日本語においても同様に不自然さが認められる²⁹⁾ ので、特に授業での説明を必要としないと思われる。(次の文の前のアスタリスクは非文法的な文を表す。)

*It's.

*それはある。

*I get up.

*私は起きる。

*I go.

*私は行く。

同じように修飾語句を必要とする文構造は他に b の文構造（主語+動詞+補語）、c の文構造（主語+動詞+目的語）にも観察されるが、小学校では b は

Are you good at basketball?

の文構造が使用される可能性があるのみ。しかし、cの文構造をもつ文で次の下線部は

I have breakfast at 6:00.

What do you want for your birthday?

You can see it on your right.

She can cook well.

など、かなり重要な情報を伝える部分である（下線は引用者）。したがって副詞も修飾語句として重要な役割を果たすので、「なくても文が成り立つ部分」という説明は適切ではないことに注意したい。

2.3 慣用的な表現

特に文法的な（構造的な）説明をせずに慣れることで身につけたい表現として、wantの丁寧体である（仮定法による）would likeが使用される例がある。

What would you like?

I'd like spaghetti.

文レベルでは「はい、どうぞ」にあたる

Here you are.

が必要になる場合もあると考えられる。他にも、excuse me、I see、thank youなど定形的表現は適宜使用が認められている。³⁰⁾

2.4 文の種類

文の要素と修飾という観点では文の種類には直接かわらないと思われるが、指導者が知っておくべき（学習者に内在化させる）規則について簡単に見ておきたい。広い意味では文の構造が変化する規則ということになるが、ここでは小学校において使用される文についてののみ考えてみたい。

文は単文を扱うとして、平叙文、疑問文、命令文を指導することになるが、このうち否定文による疑問文は扱わない。³¹⁾

平叙文を疑問文にする場合、及び平叙文を否定文にする場合には、基本的には2種類の変形がある。すなわち、

- 1 be動詞、助動詞（can）に関するもの
- 2 一般動詞（上記以外の動詞）に関するもの

である。この2種類を例文³²⁾で確認してみよう。

疑問文

1 Are you from Canada?

Can you dance well?

2 Do you like blue?

否定文

1 She isn't a teacher.

I can't play the piano.

2 I don't like soccer very much.

また、否定命令文においては2の形が1にも使用される。すなわち、「Don't + 原形」となる。

2 Don't be noisy, Ken.

2 Don't run here.

ここで観察される特徴は、疑問文では1が「転倒」（ひっくり返し）、2がdoを持ち込むこと、否定文では1では「直付け」、2ではdoを持ち込むこと、否定命令文ではdoの持ち込み、である。³³⁾

さらに疑問詞のある場合は、その語または句を文頭に出す、その際この規則の方が上記の疑問文の語順の規則より優先される。

3. 日英語の語順

日本語と英語の語順については、すでに見た文構造では主語の後が入れ替わっている。

主語 + 動詞 + 補語

My nickname is Ken. ニックネームはケンです。

主語 + 動詞 + 目的語

I study math. 私は算数を勉強する。

主語と動詞の間を境界線とすると、そのあとの部分が日本語と英語では相互に鏡像関係となっていると考えたと文構造の違いを捉えやすい³⁴⁾。すなわち、is Ken / study mathをそれぞれこの紙面の裏側から要素単位に見るなら、ken is / math studyと並び、対応する日本語の「ケン/です」「算数(を)/勉強する」の配置が得られる。この観点は英語の前置詞句、それに対する日本語の「名詞+助詞」の構造でも同様で、修飾語句を伴う

主語 + 動詞 + 副詞句

We went to Kyoto. 私たちは京都に行った。

においても、went / to Kyoto から「京都 に / 行った」という「鏡像」が得られる。(助詞を後置詞と考えることで、英語の前置詞句に対して日本語の後置詞句という捉え方はこの対称性を際立たせている。)

ところが、修飾の構造では、2.2.1.2 で見たように、対称性が認められないものがある。一般に、次のように日本語では語レベル、句レベルにおいて基本的に修飾する部分は前置されるが、英語では語レベルにおいて形容詞は基本的に前置、副詞はその性格により前置、後置の両方があるため、鏡像関係は語レベルでは完全な対応を示さない³⁵⁾。

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| (1) <u>便利</u> な辞書 | a <u>useful</u> dictionary |
| (2) <u>速く</u> 走る | run <u>fast</u> |
| (3) <u>よく</u> 来る | <u>often</u> come |

(2) のみがそれぞれの語の切れ目を境に右と左がそれぞれ鏡像となっている(速く / 走る → 走る / 速く → run / fast) が (1) (3) では日英語とも同じ語順である。しかし句レベルではほぼ鏡像関係が保たれていると言える。(前置詞 / 後置詞を太字にして示す。)

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| (4) 泳げる | can swim |
| (5) <u>水</u> を飲む | drink water |
| (6) 私 <u>の</u> 友人(のひとり) | a friend of mine |
| (7) <u>車</u> で | by car |

単語レベル、句レベルで修飾の形態を、連結する語(句)を*として、また下線部で修飾する部分を示して、まとめると、

(i) 単語レベル

日本語	<u>形容詞</u> +名詞	英語	<u>形容詞</u> +名詞
	<u>副詞</u> +動詞		<u>動詞</u> + <u>副詞</u>
			<u>副詞</u> +動詞

(ii) 句レベル

日本語	名詞* / 名詞	英語	名詞 / *名詞
	名詞* / 動詞		動詞 / *名詞

となるが、連結詞は句レベルでは、助詞(日本語)と前置詞(英語)が用いられることになる。³⁶⁾

このように、文の要素間の大部分に規則的な対応関係があるということは英語の(または日本語の)学習者にとっては便利な特徴と言えるが、あまり強く意識されていないように感じられる。その理由のひとつは連結詞とその構造の違いに対する認識、さらに日本語の助詞が連結詞であるという認識が希薄であるためかと思われる。

小学校においては、他の句レベルの修飾部をつくる分詞と不定詞は文法項目として極力扱わないので鏡像関係は把握しやすいのではないかと思う。

4. 日本語の主題化と日本人の英語

語順に関しても日本語の干渉のため、ある程度慣れている人でもつい、Yesterday, to Osaka, I went. という文が出てしまうことがあるが、それよりも強い感覚として日本語の主題化の習慣を英語に取り込むこともよく観察される。

主題優位言語と主語優位言語という、言語の類型化する一つの尺度から見ると日本語は前者に属し、英語の基本的な枠組みである「主語+述語」という形態に対し、「主題+陳述」という形を好むとされる。³⁷⁾ この特性は基本的な文構造において英語の「主語+動詞+目的語」の多用化³⁸⁾にもかかわらず、日本語では同じ要素をもつても「主語+目的語+動詞」の語順意識もはたらくため、日本人の英語に強い影響を与えるにちがいない。主題化をとまなう英語が多用されると言われるシンガポールの英語³⁹⁾で

Certain medicine we don't stock in our dispensary.
薬によっては、当薬局では扱ってないものがあります。

という文(訳は引用者)が聞かれるというが、この文でも意思疎通は可能で、むしろ同傾向の母語を使う英語使用者には理解は容易であるかもしれない。

小宮(2016)は、日本人の英語でも、明日のプレゼンテーションを心配する学生が *Tomorrow is worried, 「明日は心配だ」と言うのはまずいが、「落ち着かない」(I feel nervous.)を思いつき

About tomorrow, I feel very nervous.

も受容されるに違いないとしている。⁴⁰⁾

このような日本語の発想に引かれる英語も無碍に否定するのではなく、標準的な表現の提示と同時にコミュニケーションの成功をたたえるべき態度も求められることを指摘しておきたい。

注：

1. 文部科学省 (2018a)、p. 11.
2. 同上、p. 26.
3. 同上、pp. 25-26.
4. 同上、p. 67.
5. 同上、p. 91.
6. 同上、p. 63.
7. 同上、p. 65.
8. 同上、p. 66.
9. 同上、p. 92.
10. 同上。
11. 同上、p. 130.
12. 同上、pp. 96-97.
13. 例えば、安藤 (2005) pp. 16-26。8種類になるのはここに挙げられている要素の他に義務的な副詞句を修飾として必要とする構造の文を加える場合である。後述。
14. 文部科学省 (2018b)、p. 41-43.
15. 「エ 文、文構造及び文法事項」文部科学省 (2018b)、p. 36-51.
16. 文部科学省 (2018a)、p. 96 において、[主語+動詞] というような単純な構造の文も「副詞句や前置詞句が加わると意味の理解が難しくなる場合がある」と注記があるということは、副詞句の役割、前置詞句 (副詞句または形容詞句) の役割の理解を前提にしている。
17. 同上。下線は引用者。最初の文中の get up は二語動詞 (句動詞) として「動詞」として扱う。
18. 文部科学省 (2018a)、pp. 97-98.
19. 同上。下線は引用者。
20. 単語レベルの形容詞修飾は基本的には前置であるが、something、somebody のような語では後置となる。小学校の教科書、文部科学省 *Let's Try! 1* (東京書籍 2018 年、p. 20) には、
I see something white.
の例がある。
21. 引用例は以降、特に注記のない場合は文部科学省 (2018c) 内の「第 5 学年 年間指導計画例 (3 月最終版)」「第 6 学年 年間指導計画例 (3 月最終版)」より。
22. 中心的な役割を担う語をその内部にもち、全体で同じ統語的機能をもつ構造。直接構成素分析 (IC 分析) 上の内心的構造等について詳しくは、例えば、齋藤ほか (2015) p. 172 参照。
23. 以降、次の教科書からの引用例はその後のカッコ内に使用学年とページ番号で示す。下線がある場合は引用者。
文部科学省 (2018) *Let's Try! 1*、東京書籍 [3 年生]、*Let's Try! 2* [4 年生]、*We Can! 1* [5 年生]、*We Can! 2* [6 年生]
24. また句動詞として、get in が Let's get in the line. 「列に入りましょう」としての使用例がある [6-57] が、これは (全体で) 他動詞で、前置詞 in が the line を (目的語として) とって get up と同様 get の対象は「自分自身」である。文部科学省 (2018a) においては、句動詞はより広い意味の「連語」の一部という扱いになっている (p. 91)。
25. 金田一 (1988、p. 86) に、連体修飾句 (形容詞句) をつくる「格助詞は「の」一つしかない」とある。下内 (2014、pp. 280-281) においてもこの日英語の非対称性について注意をうながした。
26. 文部科学省 (2018a)、pp. 96-97.
27. ただし、教科書内には次の文も使用されている。
形容詞修飾
a big fog on a log [6-33]

the famous nine pines at the shrine [6-57]

目的格補語

I can see a big fog on a log. [6-33]

さらに、分詞の例として次のような用法も見られる。

A big frog on a log and a jogging dog. [6-33]

Tall and small players, all playing ball. [6-73]

これは 2.1 で示した動詞の用法中、分詞の形容詞用法にあたる。現在分詞の場合は「状態性」をもつ。

28. 例えば、SVC の構文の「意味構造は「主語イコール補語」という「同定」(identification)」にあり、主語と述語の間の (統語的な) 意味関係は分かりやすいとしている (小寺 1990、p.11)。
29. 安藤 (2005) p. 16。基本文型を 8 種類とするのはこのような義務的な修飾語句を文の要素とみるためである。
30. 文部科学省 (2018a)、p. 91.
31. 同上、pp. 92-95.
32. 同上。
33. それぞれ順番に、
転倒疑問文
do/does/did 疑問文
直付け否定文
do/does/did 否定文
と一般に呼ばれているものである。
34. 鏡像関係については、影山太郎 (1981) を参照。
35. 例も一部は影山太郎 (1981) からのもの。節レベルは省略している。詳しくは下内 (2014) を参照。
36. ある語 (群) A とまたある語 (群) B をつなぐ場合には英語では A/*B、日本語では A*/B (/ は意味の切れ目) という構造が基本であるが、これはその並列構造においても同様である。A / and B に対して A と / B。この並列構造は文部科学省 (2018c) には例はないが 5 年生、6 年生用の教科書 (*We Can! 1*、*We Can! 2*) には使用されている。
37. 小宮 (2016) pp. 120-126.
38. 小寺 (1990) p. 11.
39. 小宮 (2016) p. 146.
40. 小宮 (2016) p. 146。例文も同所から。

引用文献：

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』開拓社
影山太郎 (1981) 「日英語の鏡像関係」『言語』12 月号、大修館書店、pp. 54-61.
金田一春彦 (1988) 『日本語』(新版、下) 岩波書店
小寺茂明 (1990) 『英語指導と文法研究』大修館書店
小宮富子 (2016) 「日本人英語の文法」塩澤正ほか『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』くろしお出版、pp. 119-152.
齋藤純男ほか (2015) 『明解言語学辞典』三省堂
下内充 (2014) 「連結詞から見る日英語の文構造と英語の基本文型」塩澤正ほか編『現代社会と英語—英語の多様性をみつめて』金星堂、pp. 275-283.
文部科学省 (2018a) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編 (平成 29 年 7 月)』開隆堂
文部科学省 (2018b) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編 (平成 29 年 7 月)』開隆堂
文部科学省 (2018c) 「新学習指導要領に対応した小学校外国語教育新教材について」(初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室、平成 30 年 9 月 26 日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/houkoku/1382162.htm

The “World Englishes” Paradigm and
English Education
in Japanese Elementary Schools
— Teaching of English Pronunciation and
Sentence Structures (2) —
SHIMOUCHI Mitsuru and YONEDA Naomi